

近代中東・イスラーム世界における プリント・メディアの歴史と構造

平野淳一[†]

本論では、エジプトを中心とするアラブ世界やイラン、トルコにおいて、新聞や雑誌といったプリント・メディアがどのような歴史的経緯のもとに普及・発達していったのか、ヨーロッパとの国際関係、支配者の政治社会政策、知識人の文化活動などに着目しつつ明らかにする。

A Historical and Theoretical Study on the Print Media in the Modern Islamic World

Junichi Hirano[†]

This paper aims to reconsider a historical and theoretical process of development of the print media in the Arab world, Iran and Turkey, with special reference to their international relationships with the West and the governors' social politics and the intellectuals' cultural activities from the latter half of the 19th century to the beginning of the 20th century.

1. はじめに

本論では、近代と邂逅したイスラーム世界の政治的変容過程を明らかにする。その際、アメリカの政治学者 B・アンダーソンや日本の中東人類学者大塚和夫の共同体に関する議論を参照し、帝国と王朝によって政治的に代表されてきた中東を中心とする伝統的なイスラーム世界が、近代との邂逅を経て各地域の言語に基づくネーションへと再編されていく一方、聖典クルアーンの言語であるアラビア語で結ばれる共同体がプリント・メディアの普及によって強く「想像」されていく点を明らかにする。

2. 理論的背景

アメリカの政治学者 B・アンダーソンがナショナリズムを中心に共同体論について論じた有名な著書『想像の共同体』のなかで提起した重要な概念の1つに、「印刷・出版資本主義」がある [アンダーソン 1997: 82-87]。そこでは、近代の到来とともに印刷・出版資本主義の興隆によって、前近代の西洋における宗教的・学術的に規範な「聖なる」言語であったラテン語の地位が相対化し、英語、フランス語、ドイツ語といった「卑俗な」、あるいは「土着的」な言語が人々の間で正統的な書き言葉として定着したこと、そして、これらの言語がそれぞれの地域における近代的なネーション意識の高揚に意味的な「国家語」として機能したことが論じられている。

現代中東をフィールドとする文化人類学者の大塚和夫は、このようなアンダーソンの議論に着目しつつ、ネーションという「想像の共同体」の前提条件として、人・物・情報などを地球上の特定の場所から別の場所へと迅速かつ大量に運ぶコミュニケーション手段の発達と、情報伝達の飛躍的な発展、とりわけて新聞や雑誌といった印刷・出版事業の興隆を上げている [大塚 2000: 177-78]。同時に、「想像の共同体」におけるコミュニケーションの様式が、それまでの人と人が直接顔を合わせることで成立する対面的・人格的なコミュニケーションから、離れた場所にいる人間同士が顔を合わせることなくほぼ同時に意見を交わすことのできる間接的・非人格的なものへと変化していったことに注目している [大塚 2000: 185]。すなわち、印刷・出版物の流通により、地理的に隔絶した「他者」が同じ「われわれ」を構成し、同様の価値観を共有する主体として想定されるようになったことで、初めて「想像の共同体」としてのネーションが成立するようになったと指摘しているのである。

以上のアンダーソンや大塚によるネーションを中心とする近代の「共同体」をめぐる議論を導きとして、次に近代と邂逅する「共同体」としての「イスラーム世界」の内

[†] 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程
日本学術振興会特別研究員 (DC)
Ph.D. Candidate, Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University
Research Fellow of the Japan Society for the Promotion of Science (DC)

的変容を明らかにし、本論文の対象地域としての「近代イスラーム世界」の輪郭を浮き上がらせてみたい。

3. 「イスラーム世界」の再編：帝国・王朝とネーション・ステイト

以下では、近代と遭遇した「イスラーム世界」の再編過程を、国際政治と印刷・出版物を中心とする活字による言語コミュニケーションの観点から概観する。その時にさしあたり気づくことは、中東を中心とする伝統的なイスラーム世界は、一方で1798年のナポレオンによるエジプト遠征に象徴される外からの力と、1881年のエジプト・アラビー運動、1891年のイラン・タバコボイコット運動、1908年の青年トルコ革命などの各地の民族独立運動に象徴される地域内部の力との拮抗によって、他方で近代的なプリント・メディアの普及と流通によって、徐々に「ネーション・ステイト」へと再編されていったことである。この点を、以下、中東地域を中心にイスラーム世界を伝統的に代表してきたトルコ、イラン、アラブの事例を通して見ていきたい。

3.1 トルコ

今日のアナトリア半島を中心に伝統的なイスラーム世界を政治的に代表していたのが、オスマン帝国 (Osmanlı İmparatorluğu; 1299-1922) であった。そのオスマン帝国における印刷・出版事業は、15世紀末より非ムスリムによってはじめられ、ヘブライ語 (1492年) やアルメニア語 (1567年)、ギリシア語 (1627年) といった各々の言語と文字を用いた印刷出版活動が展開された。その後、1727年にムスリムによるアラビア文字を用いた非宗教的書物の印刷出版活動を合法とみなす宗教的法令 (フェトヴァー) が発布、勅令が下り、イスラーム教徒も積極的に印刷出版活動に携わるようになり、やがて宗教的書物の刊行も始められるようになった [新井 2001: 18-19]。

その後19世紀初頭にスルタン・マフムト2世 (İkinci Mahmud; 1784-1839) の治世になると、マフムトは一連の近代化改革を推進した。その一環として新聞が創刊され、1831年にはオスマン語版 (Takvim-i Vekayi) とフランス語版 (Moniteur Ottoman) からなる官報を刊行するまでに至った。後にアラブの項で述べるように、この官報刊行は当時オスマン朝の支配下にあったエジプト州知事ムハンマド・アリーによるアラビア語官報創刊への対抗としての意味を持つ一方、オスマン帝国の広域に「世論」が創出される契機となった [新井 2001: 39] a。

a ただし、印刷・出版物に対する読み書きのリテラシーのメルクマールとなる識字率をみると「官報」をはじめとする新聞や雑誌といった印刷・出版物の持つ影響力は、ごく一部の知的エリートに限られていたことがうかがわれる。20世紀前半までのオスマン帝国における識字率は判然としないが、1927年の時点での識字率は10.6パーセント (男17.4パーセント、女4.7パーセント)、1940年には22.4パーセント (男33.9パーセント、女11.2パーセント) であったことが明らかとなっていることから [新井 2001: 215]、男女合わせた識字率は少なくとも10パーセント以下、男性に限

一方、そのような新聞や雑誌をはじめとする印刷・出版物の物理的流通を支えた交通や通信制度の整備も、マフムトの治世下において推進された。具体的には、交通・通信施設が整備され、中央と地方の連絡の緊密化が図られた。1834年には郵便制度、1850年代には電信が敷設されたほか、1860年代には道路や鉄道網が整備された [新井 2001: 39-40]。後のスルタン・アブデュルハミト2世 (İkinci Abdülhamid; 1842-1918) の時代には、鉄道建設事業の推進とそのヨーロッパ資本への委任が推し進められた。1888年にイスタンブール-イズミル-アンカラの鉄道敷設権と営業権をドイツが獲得する一方、フランスは全長700キロを超えるシリア鉄道の敷設権をはじめ、1564キロに及ぶヒジャーズ鉄道 (ダマスカス-マディーナ) の建設利権を取得した [新井 2001: 91-92]。このことは、人や物を大量かつ迅速に移動・伝達する鉄道によってイスラームの宗教的聖地が帝都イスタンブールに直結することとなった点において画期であるが、しかしその一方で、オスマン帝国は西洋列強の進出に対して経済的・政治的な従属度を深めつつ、近代資本主義世界へと包摂されていったことを意味した。

次に、印刷・出版物におけるコミュニケーション手段である、オスマン帝国における「言語」の位置づけについて見てみたい。オスマン帝国は「イスラーム的世界帝国」と形容されることもあり [鈴木 1993]、帝国における公用語は現代のローマ字で表記される「トルコ語」ではなく、アラビア文字で表記される「オスマン語」であった。そして、オスマン語に基礎をおく全帝国大のコミュニケーション・システムの下に、他の諸言語に基礎をおく複数のコミュニケーションのサブ・システムが共存していたことが指摘されている。すなわち、近代以前においては、オスマン語はネーション・ステイトにおける「国語」のようなものではなく、また言語は文化的・政治的争点とはなりえなかった [鈴木 1993: 132]。

ところが、18世紀後半以降にギリシア人、ブルガリア人といったバルカンの非ムスリム臣民の中から言語に立脚した文化的ナショナリズムが勃発し、これが政治的ナショナリズムへと発展すると、人々は各々の言語にアイデンティティーの根拠を求め、「民族意識」に目覚めていくようになる。さらに19世紀から20世紀初頭にかけての政治的シンボルとしての言語の意味転換が、バルカンの非ムスリム諸民族からアナトリアの非ムスリム諸民族を経由して、キリスト教徒のアラブ人、さらにはムスリムのアラブ人へと波及すると、ムスリム・トルコ系のオスマン人は自分たちの言語であるオスマン語を再検討する中で政治的民族意識に覚醒していくようになった [新井 2001: 138-44]。オスマン語の再定義を通してトルコ民族としての政治的覚醒を提唱した知識人の筆頭に、ナムク・ケマル (Nâmuk Kemâl; 1840-1888)、ズィヤ・パシャ (Ziya Paşa; 1829-1880)、

っても15パーセント以下であったことが推測される。識字能力を持つ一部の知的エリートが、対面的なコミュニケーション手段によって顔を合わせた人々に新聞や雑誌に掲載された論考やエッセーの趣旨を直接口頭で伝えたにしても、その範囲はある程度に限定されるであろう。

シェムセディン・サーミー (Şemseddin Sami; 1850-1904) らがいる。彼らは、アラビア語やペルシア語といった「非トルコの要素」の排除を要求し、「トルコ語」への純化改革を要求するようになった。b. 実際、1908年に発生した統一進歩団による「青年トルコ人」革命では、教育現場でのアラビア語使用の制限やアラビア後教師の冷遇、過度なまでのトルコ語化の推進が目指された [竹田 2010: 37-38]。

こうして、オスマン帝国末期の知識人の中から、オスマン語から「トルコ語」への言語改革運動が発生し、改革された言語に基づく「トルコ民族」としての意識の覚醒がよび出されることとなった。中でも 1932年に国家主導で設立された「トルコ言語研究委員会 (現トルコ言語協会)」は「トルコ語」の古くて長い歴史を強調し、その「純化」を目標の第一に掲げた [新井 2001: 217]。こうして知識人による「トルコ語」の言語改革運動と国家主導による「純化」作業により、それまで帝国の公用語であった「オスマン語」は、新生「トルコ共和国」の国語としての「トルコ語」として誕生することとなった。このようにトルコは、言語の一元化による政治的支配と政治的統合を果たし、一国家、一民族、一言語のシステムとしてのネーション・ステイトへと再編されていった [鈴木 1993: 133-37] c。

以上の議論をまとめると、19世紀から20世紀前半におけるオスマン帝国は、トルコ民族の言語として再定式化された「トルコ語」を言語媒体とする印刷・出版物が流通する思想・価値観を共有する「想像の共同体」としてのネーション＝トルコへと再編されていったことがわかる。ただし、政治システムから見るならば、そのネーションへの再編はあくまで帝国 (オスマン帝国) という枠組みの中で行われていたのであった。

3.2 イラン

18世紀末から20世紀前半まで、現在のイランを政治的に支配していたのはガージャール朝ペルシア (Qājāriye; 1796-1925) であった。そのガージャール朝において、近代的な印刷技術を用いて本格的な出版事業が始まるのは、1850年代から60年代におけるナーセロディーン・シャー (Nāṣer al-Dīn Shāh; 1831-1896) と宰相アミーレ・キャビール (Mirzā Taqī Khān Amīr-e Kabīr; 1807-1852) による一連の近代化改革の流れにおいてであった。とりわけ後者のアミーレ・キャビールは、図書の出版や翻訳のためにテヘランに印刷所を設置するほか、王朝の決定を広くかつ素早く大衆に伝える手段として新聞の果たす役割に早くから着目していた [Ādamiyat 1334: 165]。

こうした背景のもとに、1851年にイランで初めてのペルシア語官報『新たなる出来事 (Taqa' e-e Etefaqiyeh)』紙が創刊されると [Ādamiyat 1334: 159-164]、これを皮切り

b この要求を体現したのが、オメル・セイフェッティンが1911年に創刊した雑誌『若いペン』である。

c この「トルコ語」の純粋化に象徴される言語改革運動の文脈において、1928年に法制化されたトルコ語のアラビア文字表記の禁止とローマ字の採用 [新井 2001: 204] は理解されるべきである。

に次々と新聞が刊行されはじめるようになった。d. イラン近現代史を専門とする八尾師はその著 [八尾師 1998] のなかで、1905年に発生した立憲革命までにイランで刊行された新聞の発行地と数を整理しているが、それを見ると、首都テヘランを中心に各都市から新聞が相次いで刊行されていたことがうかがえる。

発行地 (国内)	点数	発行地 (国外)	点数
アラーク	1(1)	イスタンブール	8(6)
アルダビール	1(1)	アレキサンドリア	1(0)
オルミーエ	7(5)	バクー	2(2)
エスファハーン	23(20)	バグダード	1(1)
バンドレ・アンザリ	1(1)	ボンベイ	7(3)
ボルージュルド	1(1)	パリ	2(1)
ブーシェフル	2(0)	ティフリ	1(1)
タブリーズ	53(37)	ハイダラーバード	2(1)
テヘラン	166(125)	デリー	1(0)
ホイ	4(4)	(スイス)	2(2)
ラシュト	30(30)	アシュハバード	1(0)
シーラーズ	11(10)	アリーガル	1(0)
ガズヴィーン	4(4)	カイロ	5(1)
カーシャー	2(2)	カーブル	1(1)
ケルマーン	4(4)	カラチ	1(0)
ケルマーンシャー	2(2)	カルカッタ	7(0)
ラーヒージャー	2(2)	ロンドン	2(1)
マシュハド	10(9)	マッカ	1(1)
ハマダー	6(6)	ナジャフ	3(2)
ヤズド	5(5)	ワシントン	1(1)

表 1: 立憲革命期末までの新聞発行状況 [八尾師 1998: 58] f

d イランにおける新聞の歴史は、ミールザー・サーレフ・シーラーズィーが、1837年にテヘランで発行した石版刷りの新聞に始まるというのが定説であるが、現在までのところその実物は見つかっていない [八尾師 1998: 59]。

e ここで、新聞や雑誌に代表される印刷・出版物が社会に与えた影響を推し量るため、人々の読み書き能力を示す1つの基準である識字率が気になるところだが、20世紀前半までのイランの識字率について関連する文献にあたったものの、さしあたり見つけることができず、ここでは不明としておきたい。

f 1920年代にベルリンから発行されたペルシア語紙『カーヴェ』にも、1920年代までにイランで創刊された一部のペルシア語紙の名前、編集者、出版地、出版年の一覧表が掲載されている。

次に,そのような新聞をはじめとする印刷・出版物の物理的流通を支えた交通・通信制度の整備について見ていきたい.ガージャール朝において交通・通信の整備は,先述した国王ナーセロディーン(1848-1907)の命のもとに推し進められた.まず道路であるが,これはイギリスやロシアをはじめとする外資の導入により展開された[八尾師 1998: 15-17].たとえば,イギリス系ペルシア帝国銀行は,1890年にテヘラン-アフヴァーズ間の,1898年にゴム-エスファハーン間の道路建設の利権を獲得する一方,ロシアは1893年にバンダレ・アンザリー-ガズヴィーン間,次いで1895年にガズヴィーン・テヘラン間,ガズヴィーン-ハマダーン間の道路建設の利権を獲得している.そして,ロシアの利権獲得を象徴するのが,1902年にロシア系割引貸付銀行が獲得したジョルファ-タブリーズ-ガズヴィーン間の道路建設利権であった.

他方,鉄道網の整備についても,外資に依存する形で推し進められた[八尾師 1998: 17-20].1872年にイギリス系ロイター通信社への鉄道敷設利権が譲渡されたことを嚆矢として,イギリス系「イラン鉄道シンジケート」による建設計画が発表されると,1912年にモハンマレ-ホッラムアーバード間,バンダレ・アッパース-ケルマーン間,バンダレ・アッパース-シーラーズ間,バンダレ・アッパース-モハンマレ間が開通し,翌13年にはモハンマレ-ホッラムアーバード-ボルジェルド間の鉄道が整備された.一方でロシア系割引貸付銀行が主体となって,1913年にジョルファ-タブリーズ間,ソフィヤ-オルミーエ間に鉄道が敷設された.さらに,イギリス,フランス,ロシアが出資する鉄道調査会社の発足およびイラン横断鉄道構想が1912年に発表されると,バク-アラト-アスタラー-ラシュト-テヘラン-エスファハーン-ヤズド-ケルマーン-カラチとカスピ海沿岸からパキスタン西部を結ぶ鉄道網の敷設が進められたg.

電信線の整備について見ると[八尾師 1998: 20-22],イギリス系「インド・ヨーロッパ電信会社」が1862年から72年にかけてテヘラン-ブーシェフル間の敷設をめぐるガージャール朝と協定を結んだことを嚆矢に,64年にはファオー-ブーシェフル-ヘンガム-バンダレ・アッパース-ジャスク-カラチを結ぶ海底電信線が開通し,ブーシェフル-ラズマンダーン-ジャスク-マスカットを結ぶ海底電信線へと接続されていった(1871年).さらに,ジャスク-チャー・バハル-ガヴァーデル-カラチ間が1868年に,カーシャーン-ヤズド-ケルマーン-バル-チェスターン間が1901年に,エスファハーン-アフヴァーズ間が1913年に結ばれ,国中に電信線が張り巡らされていった.また電話線の整備についても[八尾師 1998: 23],1902年のタブリーズを皮切りに,翌1903年にはマシュハド,ラシュト,オルミーエ,テヘラン間に敷設された.最後に郵便制度について見ると[八尾師 1998: 23-24],先述の宰相アミーレ・キ

ャビールによる駅通制度改革を嚆矢として着手され,後にオーストリア人専門家ギュスターヴ・リーデラーによって郵便制度が整備された.1875年にはテヘラン-サルタナト・アーバード間,翌1876年にはテヘラン-タブリーズ間,テヘラン-ラシュト間,テヘラン-シーラーズ間が整備されることとなったh.

こうして,ガージャール朝下においてイラン国内の交通・通信制度が整備されていったわけであるが,これは同時にイランに外資への依存をもたらした.近代資本主義世界の中心であったイギリス,ロシアをはじめとする帝国主義列強への経済的従属をもたらした.

次に,印刷・出版物におけるコミュニケーション手段である,ガージャール朝における「言語」の位置づけを見てみたい.ガージャール朝においては,伝統的にペルシア語が第一の公用語であったが,19世紀後半になると,そのペルシア語は「民族としてのイラン人」という意識を形成する上で,文化的核として再定義されはじめた[八尾師 1998: 120].その代表的な事例として,著名なイラン近現代史家であるE・アブラハミアンを参照しつつ八尾師は,立憲革命期において地方の言語的少数派のペルシア語化が主張されたことに触れ,さらに後代において国民意識の形成とペルシア語の徹底的普及を呼び掛けたA・キャスラヴィー(Ahmad Kasravi; 1890-1946),国民統合の核としてペルシア語の徹底化を説いたM・アフシャール(Mahmūd Afshār)といった知識人の議論を紹介している[八尾師 1998: 119-22].

このようなペルシア語を文化的核とする民族意識が芽生えた背景には,度重なる帝国主義列強へのイラン利権譲渡に対してイラン国内でナショナリズム運動が高揚したことが挙げられる.その象徴が,1891年のタバコ・ボイコット運動と,1905年のイラン立憲革命であった.その政治的変動の過程で,ペルシア語の伝統的な位置づけが変容し,ペルシア語を読み書きしまた話す人間が「ネーション」としてのイラン人を構成するという政治的理念が発生したものと考えられる.一方で八尾師は,20世紀前半に,アゼルバイジャン地方におけるトルコ語話者に立脚したパン・トルコ主義,アラビア語話者に立脚したパン・アラブ主義への対抗としての,ペルシア語に立脚した国民国家イランの政治的統合を説いたSh・エスラーミーの議論に触れているが[八尾師 1998: 122-23],そのような議論は,ヨーロッパ/トルコ・アラブの違いさえあれ,他言語を話す外国人と識別される「ペルシア語を理解する我々」が中心となって国民国家イランを建設するという「ネーションの物語」を象徴している.

以上をまとめると,近代に入りイラン人の言語として再定式化されたペルシア語を媒体とする印刷・出版物によって表現され流布させられる思想,価値観を共有する想像の共同体=ネーションとしてのイランが,19世紀後半から20世紀前半に成立しはじめ

[Taqizādeh 1921: Sāl-e Dovvom, vol. 4: 16].

g このイラン横断鉄道構想は,一部ルート変更の修正を経て,第2次世界大戦後に完成をみる.

h 後に政府の一部局として設置され,第一次立憲制期(1906-08年)に「郵便・電信省」へと昇格される.

たことがわかる。ただし、政治システムから見ると、そのネーションは未だに王朝（ガージャール朝）という形式をとっていたi。

3.3 エジプトを中心とするアラブ地域

最後に、アラブ地域について、エジプトを中心に見ていきたい。19世紀初頭から20世紀中葉に至るまで、現在のエジプトを政治的に支配していたのは、ムハンマド・アリー朝（Dawla Muḥammad ‘Alī; 1805-1953）であった。そのエジプトにおいて本格的に印刷・出版事業が始められたのは、1821年のカイロでのブーラク印刷所の設立を嚆矢とする [Raḍwān 1952]。この政府主導の印刷所では、1798年のナポレオン遠征時に持ち込まれた印刷機を用いて、アラビア語・トルコ語・ペルシア語による書籍や雑誌の旺盛な印刷・出版が行われたj。以下の表は、ブーラク印刷所から刊行された書籍のジャンルと点数を示している。ここでアラビア語圏であるエジプトであるにもかかわらずオスマン語書籍の版数が多いのは、当時のムハンマド・アリー朝が形式的にはオスマン帝国の政治的支配下にあり、帝国側にオスマン語書籍の刊行の需要があったためである [林 2009: 9]。

ジャンル	オスマン語 (トルコ語)	アラビア語	ペルシア語	計
行政学		2		2
軍事	39	9		48
産業		3		3
教育		1		1
ヨーロッパ史	8	3		11
イスラーム史	5			5
地理		3		3
哲学		2		2
道徳	1			1
宗教	6	6		12
神秘主義	4			4
儀式	2			2

i 「国民国家」としてのイランは、1925年に成立したパフラヴィー朝と比定されることが多い。実際、それまで伝統的に国を指す言葉として使用されてきた「ペルシア」あるいは民族を指す言葉として使用されてきた「ペルシア人」という呼称が、「イラン」あるいは「イラン人」へと変化した国際社会の中で流通し始めるのは、1935年に時のパフラヴィー国王レザー・シャーによる外交ルートを通じた国際社会への通達を嚆矢とする [八尾師 1998: 98-99]。

j ブーラク印刷所の最初の出版物は、1822年に印刷されたアラビア語—イタリア語辞書『Dizionario Italiano e Arabo』であった [林 2009: 7]。また、ブーラク印刷所から刊行された版は「ブーラク版」として今日においても高い評価を得ている。

預言者伝	6			6
宗教法	1	1		2
辞書	9	1		10
文法書		21		21
詩	24	5	2	31
散文文学	4	2	4	10
修辞学		1		1
数学	10	6		16
自然史		1		1
地学		1		1
工学		7		7
園芸学		1		1
獣医学	1	11		12
農業	1	2		3
医学	1	14		15
百科事典		4		4
その他	3	5		8
合計	125	112	6	243

表 2: 1842年までのブーラク版の内訳 [林 2009: 8]

このようにブーラク印刷所で書籍の刊行が本格的に始められると、それに続く形で官報も創刊されるようになった。エジプトにおける史上初の官報『エジプトの出来事 (al-Waqā'i' al-Miṣriyya)』は、1828年に同印刷所から印刷・出版され、当初はオスマン語とアラビア語の両言語によって併記されたk。

次に、そのような新聞・雑誌をはじめとする印刷・出版物の物理的流通を支えた交通・通信制度の整備について見ていきたい。ムハンマド・アリー朝において交通・通信の整備、とりわけて道路・鉄道網のそれは、アッバース・ヒルミー1世 (‘Abbās Ḥilmī I;

k この当時の人々がこれらの書籍や新聞といった活字印刷媒体を利用できたかどうか推し量る上で1つの基準となる識字率について見てみたい。エジプトの近代高等教育について分析したレイドはその著書の中で、20世紀前半から中葉におけるエジプトにおける非識字率をまとめた表を提示しているが [Reid 1990: 113]、その表から判断する限り、1907年の時点で男性の識字率は13パーセント、女性は1パーセント、男女合わせると7パーセントであることがわかる。これより、1907年以前の19世紀においては、男女ともにその識字率はさらに低かったものと思われる。すると、新聞や雑誌、書籍に書かれた文字を読解する人間は社会のごく一部に限られ、少数の知的エリートのみがそれらプリント・メディアを発信あるいは受容したことが推察される。たとえ識字能力を持つ一部のエリートが、対面した人々に新聞や雑誌に掲載された論考やエッセーの趣旨を直接口頭で伝えたにしても、その範囲はある程度に限定されるであろう。

1812-1854) 治世下の外資導入政策により実質的に始まった。まず、イギリス系のスティーヴンソン社によってカイローアレキサンドリア間の工事着工がなされると [山口 2006: 110]、ムハンマド・サイード (Muhammad Sa'id; 1822-1863) 治世下の 1855 年にはカイローアレキサンドリア間、1858 年にはカイロ・スエズ間が開通した。これにより、地中海と紅海との間の交通が飛躍的に改善されるようになった [山口 2006: 112-13]。さらにサイード治世下には電信線の敷設、港湾整備も本格的に着手されるようになった。このようなインフラストラクチャーの整備は歴代の支配者の関心事としてあり続け、ヘディヴ・イスマーイール (Khidiv Ismā'il; 1830-1895) の治世下に入ると、鉄道の延長 (910 マイル)、橋梁の建設 (429 橋梁)、港湾の整備 (アレキサンドリア、スエズ)、灯台の建設 (15 ヲ所)、電信線の敷設 (5190 マイル)、道路の建設 (数千マイル) といった大々的な設備投資と整備が行われた [山口 2006: 135]。下の表は、1860 年代から 70 年代にかけてのエジプトの運河・灌漑設備、電信、鉄道敷設の状況を示したものである。

	1862 年	1879 年
運河・灌漑設備	4 万 4000 マイル	5 万 5180 マイル
電信	630 マイル	5820 マイル
鉄道	275 マイル	1185 マイル

表 3: 1860 年代から 70 年代までのエジプトの運河・灌漑設備、電信、鉄道敷設の状況 [山口 2006: 163]

道路や港湾、鉄道といった社会的インフラの整備を象徴するものとして、スエズ運河の建設が挙げられる。この運河は、フランス人技師フェルディナン・ド・レセップス (Ferdinand Marie Vicomte de Lesseps; 1805-1894) の指導のもとに 1854 年に工事が始まり、多数の死傷者と莫大な経費を伴いながらも、1869 年に開通をみた。これにより、地中海と紅海が直結し、近代世界交通体系の発展に重要な貢献がなされた。しかしその一方で、スエズ運河建設にかかった莫大な費用は、英仏といった列強諸国への対外債務の要因となった [長沢 2002: 529-30]。

こうして、ムハンマド・アリー朝下においてエジプト国内の交通・通信制度が整備されていった。しかしそれは同時に、エジプトが西洋を中心とする近代資本主義世界へと組み込まれていったことを意味した。

次に、印刷・出版物におけるコミュニケーション手段である、ムハンマド・アリー朝のエジプトを中心とするアラブ地域における「言語」の位置づけを見ていきたい。アラブ諸地域は 20 世紀前半までオスマン帝国の支配下にあり、行政言語としてオスマン語が用いられる一方で、各地域社会の公の場や教育現場ではアラビア語によってコミュニケーションがなされていた [竹田 2010: 35]。ところが、19 世紀後半になると、そのアラビア語は「民族としてのアラブ人」意識を形成する上での文化的核として再定義されていくようになった。それは、シリアやレバノンといったいわゆる歴史的シリアのア

ラブ文芸復興の文脈においてははじめられた。

アラブ文芸復興においてアラビア語の重要性を強調する点で指導的な役割を果たしたのが、ブトルス・ブスターニー (Boutros al-Bustāni; 1819-1883) とイブラーヒーム・ヤーズィジ (Ibrāhīm al-Yāziji; 1847-1906) といったアラブ人キリスト教徒であった。彼らは、1860 年の宗派对立によるレバノンの内乱を背景に、またオスマン帝国内におけるアラブ・キリスト教徒の地位向上のための一つとして、言語を紐帯とするアラブの共通性を説いた。そのために、ブスターニーは文法書『灯 (Miṣbāh)』辞典『大言海 (Muḥit al-Muḥit)』を刊行してアラビア語教育の推進を図るほか、ヤーズィジは同意語辞典の編纂や「現代と言語」「タアリーブ (アラビア語化)」などの論考を著し、さらに『新聞の言語』では古典語に基づく新たなアラビア語の語彙や文体を模索したのであった。そうして、このようなアラビア語という言葉とその文化的遺産に基づくアラブ人意識を覚醒させることで、宗教・宗派を超えたアラブ民族の連帯を強調した。そのために、アラビア語は民族語として見なされはじめたのであった [竹田 2010: 36]。

このようにアラブ文芸復興を先導したシリア人知識人の中には、19 世紀後半にエジプトへと活動の場を移す者も多く、行く先々でさらに文芸雑誌や新聞の刊行を精力的に進めていき [Ḥasanayn 1983: 82-84]、民族語として再定義されたアラビア語に対する認識はエジプトでも次第に浸透し始めることとなった。エジプトは、イギリスに対する民族運動であった 1881 年のアラビー運動が「エジプト人のためのエジプト」を標榜したことによく示されているように [長沢 2002: 79]、アラブ民族としての覚醒よりも国民主義的な色彩がそれまで強かった。しかし、先述したブーラーク印刷所の造営にもなるアラビア語古典文献の再生と校訂作業の活性化、アラビア語官報『エジプトの出来事』の発行、翻訳活動の奨励などは、エジプト社会におけるアラビア語の規範性の復興に大きく作用し、20 世紀前半に胎動しはじめるアラビア語を紐帯とする共同体形成への社会的意識の醸成に寄与したものと考えられる。実際、第 1 次世界大戦後に 1919 年革命を経て独立すると、エジプトはその憲法においてアラビア語を公用語として明確に規定することとなった [竹田 2010: 62] m。

l また、ヨーロッパに留学した啓蒙的イスラーム知識人リファア・タフターウィー (Abū al-'Azīm Rifā'a Rāfi' al-Taḥṭāwī; 1801-1873) の著した文法書『書庫の財宝 (al-Tuḥfa al-Maktabiya)』は、外来の概念・用語のアラビア語化や古典文法の革新的な解釈を示しており、同文法書が 19 世紀後期までエジプトの国定教科書として採用されていることを考えれば、エジプトにおける近代教育の展開とアラビア語の普及に大きな影響を与えたことが推察される [竹田 2010: 37]。

m そうしてアラビア語をアラブ人の民族言語とみなす思潮は、やがて 20 世紀前半から中葉へと引き継がれていき、1940 年代にアラブ民族主義者サーティウ・フスリー (Sāṭi' al-Ḥuṣrī; 1883-1967) にして「住民がアラビア語を話している国はすべてアラブである」、「アラブの国々に帰属し、アラビア語を話す者はアラブ人である」と言われるまでになった [小杉 2006: 158, 743]。こうしてアラブ地域では、アラビア語はアラブ民族を文化的に規定する際の第一の要素として再定義され、

以上の議論をまとめると、近代に入りアラブ民族の言語として再定式化されたアラビア語を媒体とする、印刷・出版物によって表現され流布させられる思想、価値観を共有する「想像の共同体」＝ネーションとしてのアラブが、20世紀前半に誕生してきたことがわかる。ただし、政治システムから見るならば、そのネーション形成は、特にエジプトにおいては未だ王朝（ムハンマド・アリー朝）という枠組みに依拠したものであった。

以上、近代と邂逅した「イスラーム世界」の再編過程を、中東を中心に、国際政治と印刷・出版を中心とする活字による言語コミュニケーションの観点から概観してきた。そこでは、中東を中心としたイスラーム世界が、一方で国際的な外からの力と地域内部の力の拮抗によって、他方で近代的なプリント・メディアの普及と流通によって、トルコ語で言語コミュニケーションが可能となるネーション＝トルコ、ペルシア語で言語コミュニケーションが可能となるネーション＝イラン、アラビア語による言語コミュニケーションが可能となるネーション＝アラブ地域へと再編されていく過程が明らかとなった。

4. プリント・メディアの普及と「近代イスラーム世界」の想像

ただし、アラブ・イラン・トルコの3つの「ネーション」のみに伝統的なイスラーム世界の再編過程を帰属させることは、実のところ精確ではない。確かに、3つのネーションが生成されていったことは事実であるが、その一方で、それらを超越するメタ・ネーションとも形容できる地域が形成されていったのである。それこそが、本論の分析対象地域となる「近代イスラーム世界」である。そのことを説明するために、ここでイスラームにおいてアラビア語の有する特殊な位置づけを確認しておく必要がある。

アラビア語は、イスラームの聖典クルアーンの言語であることから容易に想像されるように、宗教としてのイスラームと不可離の関係にある。イスラームを学ぶ人間、とりわけ宗教的知識人（ウラマー）を志すものは、いつの時代、いかなる場所、どの出自にあっても、その習得が必須とされてきた、まさに「聖なる」言語である。またアラビア語は、イスラーム世界において学術言語としての機能を伝統的に果たしてきた [東長 2002: 76]。前近代の知識人による哲学書や倫理学書をはじめとする人文系の文献、政治学といった社会科学系の文献、さらには物理学や化学、宇宙論といった自然科学系の文献は、その圧倒的多数がアラビア語で著されてきた。このようなアラビア語の特性を鑑みると、ここでアラビア語を宗教的・学問的な規範言語とみなす人々の間に、「イスラーム世界」という共同体が育まれる余地が成立するⁿ。

政治的争点になっていったのである。

ⁿ 日本のスーフィズム研究を代表するイスラーム学者である東長靖は、アラビア語を学問的・宗教的な規範言語としてみなす世界を「イスラーム世界」としてくくっている [東長 2010: 3]。

その上で、本論でその「イスラーム世界」という言葉に近代という形容詞をつけるゆえんは、まさにアンダーソンと大塚が着目した、印刷・出版物などのプリント・メディアの登場に代表される情報伝達手段の劇的な変化にある。それまでの伝統的なイスラームの知の獲得様式は、一般に、指導者と従者との「直接的」かつ「人格的」な出会いに基づいたものであった。そのため、前近代のイスラーム世界には、長旅をいとわず、遠隔地に住む偉大な宗教学者を訪ねる者も多くいた。しかし、近代になって印刷出版物を利用できるようになると、活字媒体を通じた「間接的」かつ「非人格的」な関係によって、遠隔地から発せられた教えや思想を人々は受容できるようになったのである [大塚 2000: 185]。ここに、イスラームの言語であるアラビア語を言語媒体とする近代的な印刷・出版物が流通し、間接的・非人格的なコミュニケーションによってイスラームの知のやりとりが可能となる世界、すなわち「近代イスラーム世界」が成立する。中東をフィールドとするアメリカの人類学者 D・アイケルマンは、アラビア語を言語媒体とするイスラームに関する印刷・出版物の脱領域性・脱人格性について「印刷・出版イスラーム (print Islam)」と呼び [Eickelman 1989]、そのようなプリント・イスラームに基づくイスラームの主義主張の流通・拡大を大塚は「遠隔地イスラーム主義 (long-distance Islamism)」と名付けている [大塚 2000: 193]。対象を指示する名称は異なるものの、両者に通底しているのは、大量印刷・出版・配布の可能な新聞や雑誌というプリント・メディアを用いて、アラビア語による活字情報伝達のネットワークが広がり、新たなイスラーム・ウンマという「共同体」が人々の間で想像され、形成されていくという点である。

アンダーソンが指摘しているとおおり、ヨーロッパでは、中世のキリスト教共同体を文化面で支えていた唯一の「聖なる」言語であるラテン語の権威の失墜を通して、近代的ナショナリズムが誕生してきた。しかし、イスラーム世界においてラテン語に比肩する位置にあると思われるアラビア語は、それと全く同じ道を歩むことはなかった。先述のように、確かにアラビア語は、近代において、ネーションとしての民族を規定する第一の要素として新しい意味を吹き込まれることもあったが、しかしその一方で、アラブ人であれ非アラブ人であれ、ムスリムの大半はアラビア語をアッラーの言葉の集成である「聖なる」クルアーンの唯一の言語であると確信していることも事実なのである [大塚 2000: 189-90]。o。「イスラーム世界の場合、『聖なる』言語としてのアラビア語は、近代に入ってもなお人々に『ネーション』とは全く別の共同体を想像させ続けている」

^o このことは、アラビア語が民族語としての側面と規範的な宗教的言語としての側面を同時に有し、アラブ人にとって脱民族化の契機と民族化の契機の両方を含んでいるとする小杉泰の指摘 [2006: 160] と対応している。なお、アンダーソンの想定する西洋における知的共通語としてのラテン語と一般民衆が話す俗語（各国語）という2重構造にアラブ世界で近いものとして、正則文語（フスハー）と民衆口語（アーンミーヤ）が考えられるが、いずれもアラビア語であって正確に対応するものではない [小杉 2006: 160]。

という小杉の指摘 [小杉 2006: 498] は、まさに「聖なる」言語である「アラビア語」で結ばれたもう 1 つの想像の共同体=イスラーム世界を指したものとして理解できる。

そして、イスラームの言語であるアラビア語をコミュニケーション媒体として、イスラーム改革とその改革されたイスラームに基づくイスラーム復興を唱導するムスリム知識人が 19 世紀後半から登場してくるようになる。その筆頭に挙げられるのが、イラン生まれとされるジャマールッディーン・アフガーニー (Jamāl al-Dīn al-Afghānī; 1838/39-1897) とその弟子たちである。

1884 年のフランスのパリにおいて、西洋の侵略に対抗してムスリムの団結の必要性を説いたアフガーニーは、彼の弟子であり、アラビー革命に連座した廉で当時フランスに亡命していたエジプト人ウラマー、ムハンマド・アブドゥ (Muḥammad ‘Abduḥ; 1849-1905) とともに『固き絆 (*al-‘Urwa al-Wuthqā*)』というイスラーム復興を鼓吹するアラビア語の政治評論誌を刊行し始めた。そのアブドゥは許されて帰国後、シリア出身の弟子ラシード・リダー (Muḥammad Rashīd Riḍā; 1865-1935) のイスラーム改革思想を広めるために、エジプトで 1898 年に創刊されたアラビア語雑誌『マナール (*al-Manār*)』の刊行に全面的に協力した。また、同じくシリア人のアブドゥッラフマン・カワーキビー (‘Abd al-Raḥmān al-Kawākibī; 1854-1902) は、雑誌『マナール』に論考「マッカ会議 (*Umm al-Qurā*)」を連載し、イスラーム国際会議構想を世に問うたのであった。これらの出版物は、「西は北アフリカのモロッコから東はインドネシアのジャワ島まで」[Gibb 1964: 178] という言葉が象徴するように、中東のみならず北アフリカや南アジア、東南アジアなどのムスリム知識人にも多大な思想的影響を及ぼし、様々なイスラーム主義運動を高揚させることになった。インドネシアで 1912 年に創設されたアフマド・ダフラン (Kyai Haji Ahmad Dahlan; 1868-1923) による改革派イスラーム団体ムハマディヤや、アルジェリアで 1931 年に設立されたアブドゥルハミード・イブン・バーディース (‘Abd al-Hamīd ibn Bādīs; 1889-1940) らによるアルジェリア・ウラマー協会などは、その好例である [山口 2006: 178-79] p.

こうして、本論で考察の対象となった「近代イスラーム世界」は、次のように定式化される。すなわち、①政治システムの観点からは、オスマン帝国やガージャール朝、ムハンマド・アリー朝のように、ネーション・ステイト移行期の帝国や王朝に代表される一方、②各地でイスラーム改革とイスラーム復興を目指すムスリム知識人が登場し、③アラビア語を主要な言語媒体とする印刷・出版物による、間接的・非人格的なコミュニケーションに基づくイスラームをめぐる知のやり取りが成立する世界、である。

p [Dudoignon, Komatsu and Kosugi (eds.) 2006] 所収の論文は、プリント・メディアとしてのアラビア語雑誌『マナール』が、イスラーム世界各地の思想潮流にいかなる知的影響を及ぼしたのかを分析している。

5. 結論

近代においてイスラーム世界は、イギリスやフランス、ロシアといった西洋帝国主義列強による政治的経済的進出を受けるかたちで、近代的な世界システムへと包摂されていった。そのような状況の中で、ウンマを政治的に代理・表象し国際社会で可視化していたのが、オスマン帝国やガージャール朝、ムハンマド・アリー朝などの伝統的な帝国や王朝であった。一方、その近代の到来によって、イスラーム世界では印刷・出版物を中心とするプリント・メディアによって間接的・非人格的なコミュニケーションが成立することとなった。すなわち、政治システムにおいては伝統的な帝国や王朝によって代表される一方、プリント・メディアを通じてイスラームの言語であるアラビア語を言語媒体として文化的コミュニケーションが成立する世界が誕生したのである。

参考文献

- 1) 新井正美: トルコ近現代史, みすず書房 (2001).
- 2) アンダーソン, B (著) 白石さや, 白石隆(訳): 増補 想像の共同体, NTT 出版 (1997).
- 3) 大塚和夫: 近代・イスラームの人類学, 東京大学出版会 (2000).
- 4) 小杉泰: 現代イスラーム世界論, 名古屋大学出版会 (2006).
- 5) 鈴木薫: イスラムの家からバベルの塔へ, リプロポート (1993).
- 6) 竹田敏之: 現代アラビア語の成立とアラブ世界の形成(学位論文), 京都大学 (2010).
- 7) 東長靖: アラビア語, 大塚和夫ほか(編): 岩波イスラーム事典, 岩波書店 (2002).
- 8) 東長靖: イスラームにおける神秘主義と聖者信仰(学位論文), 京都大学 (2010).
- 9) 長沢栄治: アラービー運動, 大塚和夫ほか(編): 岩波イスラーム辞典, 岩波書店 (2002).
- 10) 八尾師誠: イラン近代の原像, 東京大学出版会 (1998).
- 11) 林瞬介: アラビア文字活字印刷の普及とムハンマド・アリー時代のブーラク印刷所, アジア情報室, 第7巻第3号 (2009).
- 12) 山口直彦: エジプト近現代史, 明石書店 (2006).
- 13) Dudoignon, Komatsu and Kosugi (eds): Intellectuals in the Modern Islamic World, Routledge (2006).
- 14) Eickelman, D. F.: National Identity and Religious Discourse in Contemporary Oman, International Journal of Islamic and Arabic Studies, 6/1 (1989).
- 15) Gibb, H. A. R.: Mohammedanism, Oxford University Press (1964).
- 16) Reid, D. M.: Cairo University and the Making of Modern Egypt, Cambridge University Press (1990).
- 17) Ādamīyat, F.: Amīr Kabīr va Īrān, Mo’assese-ye Maṭbū’ātī-ye Amīr Kabīr (1334H).
- 18) Ḥasanayn, A. Ṭ.: Dawr al-Shāmiyīn al-Muhājirīn ilā Miṣr fi al-Naḥḍa al-Adabiya al-Ḥadītha, Dār al-Wathba (1983).
- 19) Raḍwān, A. F.: Ta’rikh Maṭba’a Būlāq, al-Maṭba’a al-Amīriya (1952).
- 20) Taqīzādeh, S. Ḥ.: Kāve, Berlin-Charlottenburg (1916-1922).